

ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較 (3-1) Exner 法の特殊スコアと 整理・集計・解釈準備段階について

中京大学心理学部・心理学研究科 八尋華那雄^{注1}
中京大学心理学部 明翫 光宜

A comparison of the Kataguchi and Exner scoring systems for the Rorschach test:(3-1) The Exner system's structural summary for interpretation

Yahiro, Kanao (School of Psychology, Chukyo University)
Myogan, Mitunori (School of Psychology, Chukyo University)

The present article is the third part of a series comparing the Kataguchi and Exner Rorschach scoring systems. In the present research, the authors compared each system in terms of the methods used to summarize Rorschach scores for interpretation. Herein, a comparison of the Exner system and the Kataguchi system is presented. We expect that clinical psychologists who are familiar with the Kataguchi system can become more comfortable using the Exner system.

According to differences in the construction of the two systems, the Exner system is perceived to be much more systematic than the Kataguchi system in its approach to interpretation. In general, the Exner system is considered to be evidence based and nomothetic, while the Kataguchi system is considered to be narrative and idiographic. However, the present comparison indicates that, basically, both systems utilize scores and verbal expressions as important factors in interpretation. Furthermore, the interpretational theories of both systems are based on quantitative knowledge from previous research.

Key words: ロールシャッハ・スコアリングシステムの比較、片口法、Exner 法

はじめに

筆者らは、現在わが国で最も広く用いられている二つのロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略す）のスコアリングシステムである片口法（修正 Klopfer 法，片口-Klopfer 法）と包括システム（Exner 法）を比較して，その異同を示す作業を行っている（八尋，明翫 2004）。施行法や反応領域の記号化についての比較は(1)で既述した。(2)では，記号化の中で最も重要な決定因と形態水準評定を取り上げ，さらに反応内容と平凡反応についても比較を試みた。今回は，主に整理集計と解釈に到る作業について，両法の特徴をまとめることとする。

日頃，八尋は片口法に，明翫は Exner 法に準拠しているが，本報告では八尋が Exner 法の整理集計と解釈手続きを，片口法を用いている人にも判り

易いようにまとめと解説をし，明翫がその逆を行い，相互で検閲を行うという手続きを踏んだ。慣れないシステムを，日頃準拠しているシステムから理解できるようにするためである。この作業の結果はかなりの量になるので，3-1 と 3-2 に分けて報告することにする。3-1 で Exner 法を，3-2 で片口法について触れる。

これまでと同様に両法の異同を，片口（1987），Exner（高橋ら監訳 1991，中村ら監訳 2002），藤岡（2004）を基にまとめていく。

特殊スコアについて

Exner 法のコーディングには，既述した（八尋・明翫 2004）スコアの他に被検者の言語的特徴を取り上げる特殊スコア（Special Scores）がある。片口法では，被検者の言語的表現は Rapaport（1946）の逸脱言語表現（deviant verbalization）

注1 kyahiro@lets.chukyo-u.ac.jp

から Watkins & Stauffacher (1952) が重要として選びだした 15 項目に準拠して吟味し、 Δ (デルタ) % ($= \Sigma (\Delta \text{値} \times f/R \times 100)$) を算出する。片口は、 Δ % が統合失調症の経過、予後、豊かな内閉性と貧困な内閉性などの判別に役立つと述べている (片口 1987 p272-280)。Exner 法の特殊スコアについては、荻和・空井 (1993) の報告が既に存在するので、重複を避けるために筆者らの改めての検討は行わないことにした。しかし、Exner 法の解釈過程にこの特殊スコアを理解しておくことは不可欠なので、荻和・空井の報告と藤岡 (2004) の記述を基に特殊スコアの意味をまとめて表 1 に示しておく。必要に応じて各特殊スコアの内容・基準・意味を参照して頂きたい。

上記の他に、荻和・空井の報告では取り上げられていないが、自己知覚と対人知覚に関する特殊スコアとして GHR と PHR がある。GHR (Good Human Representation) と PHR (Poor Human Representation) は、H, (H), Hd, (Hd), Hx, M そして COP か AG の付く FM がスコアされた場合に付ける。評価は FQ (形態水準)、特定の特殊スコアの有無、解剖反応の有無、特定の図版での人間 P 反応などをチェックしながら行う (藤岡 2004 p83 参照)。しかし、例えば幽霊・悪魔・吸血鬼・鬼といった内容の反応でも、形態水準が-ではなく、言語表現に認知に関する重要特殊スコアや AG・MOR・INC・DR も付いてなければ、GHR とせざるを得ない場合があり、これらの内容が GHR かと疑問に思うことがある。

片口法で吟味する Watkins と Stauffacher の逸脱言語表現 15 項目と Exner の特殊スコアとの関係はどのようになっているのであろうか。以下に比較を試みてみた。

Watkins と Stauffacher の逸脱言語表現と Exner の特殊スコアで概念と基準が全く一致しているのは、作話的結合反応 (fabulized combination) と混交反応 (contamination) の二つのみである。Exner 法では、前者が FABCOM (or FAB)、後者が CONTAM (or CON) である。

内閉的論理 (autistic logic) は Exner 法では ALOG に相当する。基本的に、「真ん中にあるから心臓」などと言った位置 (position) 反応にスコアされるが、Exner 法ではそれ以外にも、断定的で無理な説明も ALOG に該当するとして基準を拡大している。

明細化の過程でよく遭遇する作話傾向反応 (fabulized response) に相当する特殊スコアが Exner 法にはない。この反応は、過度の情緒的明細化や特殊化の行き過ぎを指し、合理性を全く欠くわけではないが、必然性に乏しい場合にスコアされる。体験的距離の縮小ないし喪失を表している。この言語表現は、Exner 法の DV にも DR にも該当しない。

同様に、Exner 法にない Watkins らの項目は、あいまい反応 (vagueness) と荒廃色彩反応 (deterioration color) である。前者は形態知覚の明細化ができず、漠然とした類似性を訴える時にスコアされる。この種の反応の発達水準は DQv にあたり、形態水準は FQ の +・o・u のいずれの規定 (藤岡 p68) にも該当しない。後者は色彩のみに基づいて、気まぐれで象徴的な明細化を確信を持って述べる場合に与えられる。Exner 法では、CF か C がコードされるが、これも DQv で、FQ- と評定されるであろう。

blot の形態特徴と反応の形態に何ら対応が見られない不合理反応 (absurd response) も Exner 法では同様に、FQ- として処理されるであろう。

作話反応 (confabulation) は、現実的でない内閉的思考を反映するという。荻和・空井 (1993) に CONFAB (1986 年までに作成された特殊スコア) として登場するが、多分その生起頻度の少なさの故に、後に用いられなくなったようである。これに該当するものの内、「極端な情緒的明細化・特殊化」と「極端な作話的結合反応」は INC とコードされるのではないと思われる。もう一つの作話反応である DW は Exner 法の Location の分類にはなく、FQ- で処理されるであろう。

特異な言語表現 (peculiar verbalization)、奇矯な言語表現 (queer verbalization)、混乱反応 (confusion)、支離滅裂 (incoherence) は、Exner 法においては DV のレベル 2 とされるのではなかろうか。その他、象徴反応 (over-elaborate, symbolic response) は AB に、関係付け言語表現 (relationship verbalization) は PSV に、そしてズタズタ反応 (mangled or distorted concepts) は MOR に相当すると思われる。

表 1 Exner 法における特殊スコア

作成年	特殊スコア	Exner の考え方
1974 年	特殊スコアなし：妥当性に問題があるとされたため	
1976 年	<p>特殊言語表現 (unusual verbalization) ラバポート (1946) の Deviant Verbalization (逸脱言語表現) の考え方を基礎においている。 DV から ALOG まではいずれも認知の歪みを反映している。</p> <p>DV (偏奇言語表現) 繰り返しによる冗長、二重の表現、間違っ た言葉使い [レベル 1 軽度]。極端な言い間違い、造語 [レベル 2]。<ラバポートのいう DV には該当しない> 以下の INC, FAB, CON は不適切な結合に対して与えられる。 対象像や概念を現実を無視して結び付け圧縮してしまう反応。</p> <p>INCOM (不調和な結合) ラバポートの Fabulized Combination を更に細分化したもの。クロッパーの F↔C も含む。</p> <p>FABCOM 概ねラバポートの Fabulized Combination (作話的結合 反応) に相当。現実吟味力の障害とは思えない「あそび」があり、適切な距離を保った擬人化も含めている。</p> <p>CONTAM ラバポートの Contamination (混交反応) を基本。 CONTAM がスコアされると、他のスコアは付かない。 最も重要であるにも拘わらず、FQ (形態評定) で o や u が付く 場合があり矛盾している。</p> <p>ALOG ラバポートのいう Autistic Logic (自閉的論理) を反映 した Position Response (位置反応) を基にして、更に拡大した もの。拡大した故に重篤さが損なわれている。</p>	<p>INC, FAB, CON, DV, DR (Sum 6, WSum 6) は認知的処理の失敗や機能不全に 関した一種の連続体を表す。</p> <ul style="list-style-type: none"> • DV はわずかな認知のずれを反映している。 • 健常成人にもみられる。 • 反応の一部に現れた変な単語や表現。 <p>INC, FAB, CON は自我境界の障害に関係している。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 別々の概念が一つの反応へと圧縮されているもの。 • SCZI (統合失調症指標) にも含まれている。 • 二つ以上の概念が現実にはあり得ない関係を持って用いられている場合。 • A で M が付けられた場合や見えないものが透けて見えているばあいも FAB。 • CONTAM : 重篤な認知的機能不全を反映する。 • 境界が消失し、概念が融合している反応。 • Exner のデータでは統合失調症にしか見られない。 • 子どもと思春期には稀ではあるがみられる。 • 反応を正当化するために、自由反応段階から自分だけに通用する、断定的で無理な説明をする場合。 • 質問段階で生じた無理な正当化にはスコアしない。
1978 年	<p>PSV と CP は大筋ではピオトロフスキーの概念に基づいている。</p> <p>PSV 機械的固執：ピオトロフスキー (1937) の Organic Sign の中の反復 (repetition) や語句の機械的繰り返し (automatic phrase) に相当。 内容の固執：ラバポートのいう Relationship Verbalization (関 係付け言語表現) である。 同一図版内の固執：Exner 独自の基準。</p> <p>CP ピオトロフスキーの Cp (色彩投射反応) の概念を導入。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 一種の認知的な機能障害や著しい心理的などらわれ易さを反映。 • 機械的固執は知的障害や神経学的損傷のある者に見られる。 • 内容の固執は、通常、精神病理的な状態により引き起こされ、ある事柄に著しく気をとられている人に見られる。 • 同一図版内の固執は、認知の転換の失敗、認知的固さを反映している。 • 情緒機能に関する指標。望ましくない不快な感情を扱う際の手技として、主に否認を用いる可能性を示唆。
1982 年	<p>PER 特殊指標の変数の中にも含まれていない。特殊スコアに採 択された理由も定かではない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 反応を正当化するために、特異な自己の知識や体験に言及する 場合。知識をより強固なものとし、それによって自己の安定を保つ という防衛の表れ。
1986 年	<p>DR 特殊言語表現の一つ。不適切な言い回し、無関係な説明 や的外れでダラダラした表現。 クロッパーの無関係な明細化 (Irrelevant Specification) に相当。 ラバポートの作話傾向はこれに該当しない。</p> <p>CONFAB 統合の失敗を示す。統合失調症や精神病的被検者に見 られるような内閉的で奇妙な反応とは区別される。ラバポートが考 えるような非現実的内閉的思考を持つ精神病理的状态を指さず、 重篤な知的機能不全や非論理的な認知作用を反映。</p> <p>AG ラバポートのいう Aggression Response, masturbation verbalization に関係。デボス (1952) の感情カテゴリー中の hostility にも含まれている。</p> <p>MOR 不健全な反応内容。ラバポートのいうズタズタ反応 (mangled or distorted concepts) に相当。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 反応全体の表現のおかしさ。 • 被検者が課題から離れていってしまう傾向。 • 認知障害にかかわるサイン。感情や欲求の干渉による思考の 乱れを表す。 • 幼い子供、重度の発達遅滞など知的な欠損が著しい場合。 • CONFAB とされたら、他の特殊スコアや Z スコアはつけない。 • AG と MOR は特殊な反応内容。 • 対人関係や対処力不全に関する指標に含まれる。 • 社会的環境に対する被検者の反応の仕方に関する情報を提供。 • 攻撃的な行動が現在行われている場合に付け、過去に攻撃を受 けたものには AG は付けない。 • 自殺指標・うつ病指標に含まれている。 • 否定的自己イメージや自己あるいは環境に対する悲観的な構えを 反映。怒り、不満、抑うつなどの適応上の問題を示唆する。
1990 年	<p>AB ラバポートの affective-reaction verbalization に関係。</p> <p>COP デボスの感情カテゴリー中の快的感情に含まれている協力反 応 (cooperative response) に相当。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 知性化指標の中の一つ。 • 知性化による自己防衛の手段を反映している。 • Hx (人間の経験) がコードされた時に付与する。 • 明確に象徴的な表象を述べた場合に付ける。 • 対人関係の様式や対人的関心を反映する。 • 明らかに協力的か肯定的な運動が見られた場合。 • 二つの概念が積極的に関わっている必要がある。

解釈過程の概要

ロールシャッハ原法も片口法もそうであるが、Exner 法もある特定のパーソナリティ理論を背景に解釈するのではない。異なった年齢層や精神疾患の人々を対象に得られたロールシャッハ反応の特徴や集団間の差異が、人々の能力・精神的機能や発達段階とどのように結び付いているかを検討した研究の知見を基に解釈を行うのである。ロールシャッハ反応を解釈するに当たって、Exner 法では検査者は、ロ・テストや投影法の理解だけではなく、精神病理や不適応について、理論的・臨床的知識を持っていることが求められる。また、どのような人がどのような目的や状況下で検査を受けているのか把握していることも必要とされる。このことは、片口法でも同様に両法に異なる点はない。これらのことに加えて、特に最近では、検査目的を明確にし、受検者の同意を得、feedback を行うなどの倫理的配慮も求められている。

Exner 法に準拠した際、検査者は、被検者の「言葉使いの記録」を逐語記録に残し、コーディング（スコアリング）を反応順に行い、スコアの継列表（Sequence of Scores）を作成する。構造一覧表処理ソフトを用いてコーディングされたデータをパソコンに入力すると、すぐに集計され、構造一覧表（Structural Summary）が打ち出されてくる。構造一覧表（Structural Summary）とは、「100 変数から引き出される 60 以上の変数・比率・パーセント・指標のデータの頻度を構造的に図解したもの」である。構造一覧表を構成するデータは、個々の反応のコーディングから引き出されるので、コーディングの正確さに依存している。「包括システム（Exner 法）が従来の方法と最も異なるのは、その統計的に妥当性の高い解釈の実証性にある（中村 1995 p21）」が、これを支えるのは正確なコーディングである。『Exner 法の命はコーディングにある』と言っても過言ではない。

継列表と構造一覧表の上部の処理・集計の多くは、片口法では集計表（Data Sheet）の Scoring List, Basic Scoring Table, Summary Scoring Table に記された内容に相当する。また片口法では、被検者の「言葉使いの記録」だけではなく、検査者の質疑の内容も正確に記録する。どのような質問にどのように応えたかという文脈が極めて重要だからである。

次に検査者は、構造一覧表を手掛かりに、健常者の結果を基準に作った様々な変数や比率の期待値と比較しながら、個人のユニークさを捉え、行動を生み出すプロセス、その人の心理学的仕組みや機能に焦点を当てる作業を行う。構造一覧表には、人の基本的特徴（要素または機能）とそれを理解するためのテストデータの変数が幾つかのまとまり（クラスター）で提示されている。パーソナリティ特徴を示すクラスターは 7 つ。それに状況関連ストレスのクラスターが加わっている。7 つのクラスターとは、「統制力とストレス耐性」、「感情」、「思考」、「認知の特質とパターン」、「情報処理過程」、「対人知覚と対人関係」、「自己知覚」である。解釈はこのクラスターからなる表を素材に開始されるが、被検者のパーソナリティ特徴を組み立てるに当たって、その特徴のクラスター解釈の優先順位を浮き立たせ、更にそこに関連性のあるものが順次肉付けされていく（クラスター検索の順序参照）。

解釈では、逐語記録→反応の継列→構造一覧表に何度も目を移す。逐語記録、スコアの継列、構造データ全てが解釈の際に考慮されねばならない。解釈は、全てのデータを見終えるまでクラスターからクラスターへと勧めていく（Exner 2000 p33）。変数は、一つの要素または機能を理解するために用いられるのではなく、複数の特徴と関連付けながら検討することが求められる。従って、クラスター内の変数の各データは、①単独で検討した後に、②他の幾つかの変数と関連させて再検討する。クラスターを検討して所見を要約する時には、確かな結論と考えることも重要で、一時的なもの、仮のものとしておく。変数は一つの脈絡だけで解釈せず追加補足データを無視してはならないとされる。ロ・テストはパーソナリティの理解だけではなく、治療の介入計画を立てることができることも利点の一つである。それは、ロ・テストが被検者の弱点を反映し、その弱点が介入の目標と見做せるからである（Exner 1986 p515）。しかし、解釈にあたっては、長所と短所の両方を重視してまとめ、逸脱していない結果も逸脱した結果と同じかそれ以上に重要と考えることが必要である。また、ロ・テストは、被検者の現在を反映するもので、その人の過去や未来は推測的なものにならざるを得ないことも心に留めておく必要がある。

結果報告では、ロ・テスト診断の結果→結果の吟味→治療方針のコメントの順に記す。

実際の解釈過程

このスコアの継列表と構造一覧表は、コンピュータに各反応のスコアを順次書き入れていくことで自動的に作成される。そのためには、スコアリング補助プログラムを用いればよい。集計し、比率も計算されて打ち出されてくる構造一覧表は上段と下段に分かれている。

構造一覧表の上段

Location Features の欄

- Zf (Z frequency)=Z (組織化活動) と評価された反応の数
- Zsum=Z 反応の各カード毎に付与されている得点の総合計
- Zest (Z estimate)=Zf から推定される Zsum の値 (Exner 1986 p214, 藤岡 2004 p96 参照)
- W, D, W+D, Dd, S は個々の実数をカウントし、記入する
- $W_v = W$ 反応の中で DQ が v (半確定・不確定) の反応の数

反応領域の集計と blot の組織化の頻度や構成度得点 (Z スコア) 及び半確定や不確定概念の数を取上げている。片口法の集計では Z スコアはないが、用いられた領域と形態水準の関係が、集計表の Basic Scoring Table の Location 欄で一瞥できる。

Form Quality の欄

- +, o, u, -, none のそれぞれの実数
* none = 形態不確定で抽象的／知覚的体験の M に付与される
- M 反応の質の分類を記入 (MQual の項)
- W と D の質の分類を記入 (W+D の項)

その反応がどの位の頻度で出現するものかによって 4 種類に分類された FQ のそれぞれの実数と M, W, D の FQ を算出している。片口法では、この一部を上記と同様に Basic Scoring Table の Location の欄で見ることができる。

Developmental Quality の欄

- +, o, v/+, v のそれぞれの実数 (FQ- の数も記入する)

Exner 法における DQ (発達水準) と片口法での形態水準評定の概念の異同については八尋・明翫 (2004 p32-33) に述べてある。

Determinants の欄

- 決定因が 1 つのみの反応について、それぞれの決定因の数
- ペア反応の数
- 複数の決定因 (Blends) がある場合、その組合せを表記

Exner 法では blend の場合、複数の決定因を同列に扱うが、片口法では 1 個を主決定因とし残りを副決定因とし、副決定因は 1/2 のカウントとする。ペア反応はその明細化によっては、片口法では、鏡映反応 FK として処理される場合もある。

Contents の欄

- それぞれの反応内容カテゴリーの発生頻度を実数で記入

Exner 法と片口法での反応内容の分類の異同は八尋・明翫 (2004 p39-40) に示した。Exner 法では、片口法の副分類 (add) も 1 個としてカウントする

Special Scores の欄

- DV, INC, DR, FAB, ALOG, CON の 6 種の特殊スコア (Raw 6) とその他の 9 種類の特殊スコアの頻度を記入
- Raw 6 の合計 (Raw Sum 6) をカウント
- 各特殊スコアで level 1, level 2 に定められている加重点の総和 (Wgtd Sum 6) を記入

Special Score の頻度と加重点をまとめる作業を行う。Watkins と Stauffacher の $\Delta\%$ 算出と相似している。Rapaport の言語表現の分析は、言葉を分析することによって思考障害を探ろうとするものである。blot の認知とその理由付けの仕方が一般の標準から逸脱する様式や程度を測ることで、自我強度と連動する病態水準評定の傍証とした (片口 p279-280)。Exner 法では認知機能だけではなく自己や他者知覚・特定の防衛機制に関する情報も得ることができるとされる。

S-Constellation の欄

- $FV + VF + V + FD > 2$ 三次元や形態立体反応の多さ
- Col-Shd Blends > 0 色彩と濃淡のブレンド反応がある
- $Ego < 0.31$ or > 0.44 $3r + (2)/R$ 鏡映とペアの占める割合
- $MOR > 3$ 損傷反応の多さ
- $Zd > +3.5$ or $Zd < -3.5$ $Zsum - Zest$ 情報入力効率
- $es > EA$ $FM + m + Fc + c + C' > M + \Sigma C$
- $CF + C > FC$ 外的統制の悪さ
感情の直接的表出
- $X + \% < 70$ 良形態水準 (+ と o) の割合の低さ
- $S > 3$ 空白反応の多さ
- $P < 3$ or > 8 平凡反応の極端な少なさまたは多さ
- $Pure H < 2$ 純粋な人間全体反応の少なさ
- $R < 17$ 反応総数の少なさ

S-CON (Suicide-Constellation) は自殺の可能性について言及している。S-CON は 12 の変数で構成されている。被検者が 15 歳を超えていれば、スタートはこの自殺指標から最初に検討する。この指標はロ・テスト施行後 60 日以内に自殺既遂した被検者のデータ解析から導き出された。即ち、自己破壊行動に先立つデータの共通要因 12 項目の内、該当変数値 8 以上は、自殺の危険信号と受け止めるべきとされ、即座に対応が必要とされる。12 項目の意味する内容は、ある種の絶望感、強い感情の葛藤、自己卑下、悲観的思考、質の悪い判断、対人関係での疎外感である。

構造一覧表の下段

(Ratios, Percentages and Derivations)

(あ) 統制に関するクラスター

R (反応数)

反応総数を記入する。日本人成人非患者標準データでは R の平均 (Av.) は 22.85。片口では、TR は 20 - 45 の範囲。

FM (動物運動反応)

動物運動反応の数を記入する。Av.FM=3.69。

m (無生物の運動反応)

m の総和を記入。片口法の F_m , mF , m という分類はない。Av.m=1.10。

SumC' (無彩色反応の総和)

$FC' + C'F + C'$ を記入。Av.SumC'=1.36。

SumV (展望反応の総和)

$FV + VF + V$ を記入。Av.SumV=0.32。

SumT (材質反応の総和)

$FT + TF + T$ を記入。Av.SumT=0.50。

SumY (拡散反応の総和)

$FY + YF + Y$ を記入。Av.SumY=0.56。

L (ラムダ)

$F/(R-F)$ (純粹形態反応/総反応数 - 純粹形態反応) を記入。F% > 50だと L は 1 以上になる。L ≥ 1 は high Lamda style と呼ぶ。high Lamda style の人は、刺激の処理が単純かつ回避的か受検状況への防衛的構えを持っていると解される。

EB (Erlebnistypus 体験型) = M : WSumC

* C_n は WSumC に含めない。

$WSumC = FC + 2CF + 3C/2$

(片口法の ΣC と同じ。片口法では C_n や C_{sym} も C に含む。)

$M > WSumC$

内向型 (≒思考型) 感情を脇において、意志決定まで十分に考え抜く傾向を示す。日本人成人非患者標準データでは超内向型は 25%。

$M < WSumC$

外拡型 (≒感情型) 思考に感情を交え、感情を意志決定に用いがちである傾向を示す。外拡型は日本人成人非患者標準データでは 15%。

$M \approx WSumC$

不定型 意志決定や問題解決で感情が果たす役割が一定しないことを示す。不定型は 47%。

EB の値は一方が 0 かつ差が大きいと EA (利用可能な資質に関する指標) の信頼性に、感情面に大きな問題があり心理機能の低下があると Adj D (状況ストレス要因を除いた通常のストレス状況下での耐性) の妥当性に疑問が生じる。

EA (Experience Actual 現実体験) = M + WSumC

利用可能な資質に関する指標。獲得されてきた認知的能力の総体のことで、自らの行動を統制する能力・内外からの刺激による思考や感情の

活動水準・ストレス耐性を推測させる。また Adj D スコアの信頼性を評価するためにも検討される。Av.EA=6.62, range は 7~11。若年で 6~10。小学生で 4~9。

EBPer (EB Pervasive 体験型の浸透度・固定度)

問題への対処と意思決定の際のスタイルから思考が感情に支配的な影響を受けているか否か、即ち固定的か柔軟かを見る。体験型が明確な場合のみ計算する。明確とは、 $M+W\text{Sum}C \leq 10$ だが、その差が 2.0 以上あるいは $M+W\text{Sum}C > 10$ かつその差が 2.5 以上。どちらが大かによって、 $M/W\text{Sum}C$ or $W\text{Sum}C/M$

eb (experience base 基礎体験)

被検者が体験している対処を要請されている刺激の量。

$FM+m : \text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y$

FM+m は思考にかかわる刺激。

$\text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y$ は感情にかかわる刺激。

es (experience stimulation 刺激体験)

検査を含む、その時点で体験しているストレス刺激の総量。

$FM+m + \text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y$

D (difference D スコア)

$EA - es = (M+W\text{Sum}C) - (FM+m + \text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y)$

D スコアの換算表を用いる。現実に対処可能な資質の量 (EA) と対処を要請している刺激量 (es) との関係に関する情報。ストレス耐性と統制力を表す。Av.D=-0.24。

Adj es (Adjusted es 修正 es)

修正 es は es 即ち刺激体験から状況因的ストレス要因を除いたもの。平素の刺激体験を表し、そこでの感受性の強さを算出している。

$FM+m (1 \text{ or } 0) + \text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y (1 \text{ or } 0)$

m と Y は期待値が 1。(m と Y が 2 以上の場合だけ 1 にする。1 と 0 の場合はそのまま)

1 以上の m と Y は通常よりストレスが充進している状態と見做す。成人で 5~9, 12 歳以下だと低くなる。

Adj D (Adjusted D 修正 D スコア)

$EA - \text{Adj} es = (M+W\text{Sum}C) - FM+m (1 \text{ or } 0) + \text{Sum}C' + \text{Sum}T + \text{Sum}V + \text{Sum}Y (1 \text{ or } 0)$

ここでも D スコアと同様に換算表を用いて値

を得る。状況ストレス要因を除いた通常のストレス状況下での耐性。統制とストレス耐性に関する予備的な情報が得られる。Av.Adj D=-0.10

統制力とストレス耐性に関する解釈の手順
ステップ表

- 1 : Adj D (修正 D スコア) と CDI (Coping Deficit Index 対処力不全指標) 5 項目
2 つの指標を構成する変数のうち幾つかが感情と関係がある。
- 2 : EA (現実体験)
- 3 : EB (体験型) と L (ラムダ)
体験型を見る時はハイラムダ (回避型), 片口法でいうところの圧縮的統制との関連も見る必要がある。
- 4 : es (刺激体験) と Adj es (修正 es)
- 5 : eb (基礎体験)

『これらの指標を片口法の観点から理解すると、10 枚の blot 刺激に対し、どの程度の生産性・創造性を発揮して課題解決ができたか、その刺激処理での現実検討力は一貫して保たれていたか、形態以外の決定因をどの位用い得たかなどがこの統制力やストレス耐性を見る指標となっている。これらの指標は、内的衝動あるいは外的刺激即ちストレスの量と用いることのできる内的資質との関係を見ている。例えば、刺激に圧倒されているとか、強すぎる統制のために発達に必要な刺激体験を避けて来てしまったと言った特徴を見ようとしている。統制力やストレス耐性が強ければ適応的というわけではないし、刺激過剰であったからと言って未成熟とは限らない。テスト場面などの状況要因による過剰刺激状態を考慮するのも Exner 法の特徴である。』

(い) 感情に関するクラスター

FC : CF+C

感情の調節, 片口法でいう内的統制の指標。C には Cn を含む。

Pure C

形態を伴わない純粋色彩反応の量。Cn を含む。

SumC' : WSumC

無彩色 : 有彩色の比。Av.SumC'=1.36, Av.WSumC=3.71。

感情的締め付け。

否定的で内に留めておきたい感情と外に表現したい感情の割合。

Afr (Affective Ratio 感情の比率)

Afr = VIII + IX + X の反応数。I ~ VII の反応数。

Av.Afr = 0.47。

感情刺激に近づいたり、体験することへの関心に関係している。

Afr > 0.7 ⇒ 外拡, Afr < 0.65 ⇒ 内向, 不定型の平均域は 0.53 ~ 0.83, 回避型 (high Lamda) のそれは 0.45 ~ 0.65 であるという。

S (空白反応)

空白が用いられた反応数

片口法では、批判力。Exner 法では、怒り・検査への抵抗と関係。

CP (色彩投影)

色彩投影反応の数

否定的感情や無力感を否認し、肯定的感情を見ようとする防衛と関係。

Blends : R

Blends の数 : 総反応数。Av.Blends = 2.83。

現在の感情や精神活動の複雑さに関する指標。

平均域は内向型で 13 ~ 26%, 外拡型で 19 ~ 33%, 不定型で 16 ~ 36%, 回避型で 8 ~ 14%。

感情に関する解釈の手順 ステップ表

1 : DEPI (抑うつ指標) と CDI (対処力不全指標)

両指標とも感情・認知・自己知覚・対人関係の組み合わせで構成されている。両指標の得点のバランスによって感情の問題の有無を知る。

CDI ≥ 4 が多い。CDI = 4 (28%), CDI = 5 (7%)。

2 : EB と L (体験型と純粹形態反応比)

M : WSumC と (PureF/R - F) %

EB と L で対処スタイルを判別し、意思決定や問題解決に感情がどのように関わっているかをみる。

3 : EBPer (体験型の固定度)

どちらが大きいかで M/WSumC or WSumC/M。対処と意思決定をする際の柔軟性をみる。

4 : eb の右辺

SumC' + SumT + SumV + SumY

非常な精神的苦痛や不快感が存在するか否かをみる。片口法では Fc + c + C' は、被検者に認知されていない外拡傾向を示し、情緒的反応性が潜在することを表している。

5 : SumC' : WSumC

無彩色反応の総和と加重した色彩反応の得点 (ΣC) の比。

感情のコントロールの程度や感情の封じ込め・表出のあり方をみる。

6 : Afr (感情の比率) VIII ~ X / I ~ VII

7 : 知性化指標 (Intellectualization Index)

(2AB + (Art + Ay)) 特殊スコアの抽象的反応、芸術、人類学。

感情を思考のレベルで処理する知性化防衛が過度に用いられていないかをみる。3 以上であれば、検討を要する。

8 : CP (Color Projection) 色彩投影反応

苦痛や不快感をもたらす感情刺激の存在を否認し、positive な感情を当てはめようとする対処。期待値は 0。

9 : FC : CF + C (外的統御)

感情の発散や感情表現の調節に関する情報が得られる。片口法でも情緒的表現が社会的に適応的か否か、あるいは抑制が強すぎないかをみる。

10 : Pure C (純粹有彩色反応・純粹色彩反応)

純粹色彩反応の内容を吟味する。Art や AB など知的な傾向のものとは感情調節に違いがある。片口法でも C は情緒的統制の欠如と見做され、衝動性・爆発性などいくらか病的・退行的傾向と解される。

Exner 法では、Pure C は抽象芸術、装飾品、飛び散った血、火、臓器 (Exner 2000 p110) にコーディングされるが、これらは必ずしも Klopfer の形態不確定概念に相当するわけではない。半確定概念のものもあり、形態の指摘の程度にもよるが、片口法では CF とスコアされるものも含んでいる。

11 : S 反応 (Space Responses 空白反応)

図と地の逆転や結合は独自性を示すが、多すぎると反抗癖や対抗的傾向、怒りの存在も示唆する。S = 2 までなら多くはない。

12 : Blend 反応

blend の大半は色彩・無彩色・濃淡の感情に関係した決定因を含むので感情の検討に際して重要となる。blend の数と割合は現在の心理的複雑さの評価に用いられる。blend の期待値は EB と L の値によって異なる。

13: m と Y による Blend (状況ストレスに関連したブレンド)

現在示されている心理的複雑さの程度が特性なのか状況要因なのかを判別する。m や Y とで blend になっている場合が 2 以上の時は 1 とカウントし直して blend の割合を再計算する。その結果が体験型別の期待値内に収まれば、状況要因によって通常よりも複雑になっていると解される。

14: Blend の複雑さ

幾つの決定因で blend が成立しているかを検討する。3 因子の blend が R の 25% 以上あるいは 4 つ以上があると、ステップ 12 の解釈を修正する。感情体験のために複雑さが増してしまうことがあるされる。

15: 色彩濃淡 Blend (Color Shading Blends : Col-Shd Blends)

色彩反応と無彩色もしくは濃淡反応の組み合わせ。解釈には体験型 (対処スタイル) と色彩濃淡 blend 頻度の両方が重要となる。感情が不安定で混乱しているあるいは両価的であることを示している。

16: 濃淡 Blend (濃淡反応同士あるいは濃淡と無彩色反応との組み合わせ)

極めて稀な組み合わせで、非常に辛い感情体験をしており、この苦痛は感情や思考に影響を及ぼしていると考えられる。

『これらの指標を片口法の観点から理解すると、色彩反応 (その際の形態との融合性)、無彩色反応、色彩投影反応、色彩カードの反応量、複数の決定因の組み合わせなど主に Psychogram の右辺や空白反応を感情指標として取上げている。Exner 法では、FC:CF+C, Afr, S, CP, blend 反応から被検者が感情をどのように使っているか、感情にどのように反応しているかの情報を得る。片口法では、情緒的側面の評価は、スコアから情緒の統制 (Klopper に準拠して外的統制・内的統制・圧縮的統制のあり方) や FC+CF+C:Fc+c+C' から快的・積極的感情や沈んだ陰鬱な感情の存在を、反応内容の情緒的ニュアンスを DeVos の affective symbolism (名古屋ロールシャッハ研究会 1999 p34-43) などを用いて分析する。』

(う) 対人知覚に関するクラスター
(Interpersonal Perception & Relations)

* 自己知覚と対人知覚のクラスターは一緒に検討する。自己知覚の方が先であることが多いが、DEPI>5 かつ CDI>3 か CDI>3 であれば対人知覚を先に検討する。

COP (cooperation 協力運動反応)

対象が明らかに協力的か、交流が深い場合にコードする。対人交流に対する肯定的な見方を反映している。Av.COP=1.13。

AG (aggression 攻撃運動反応)

攻撃行動が現在行われている場合にコード。対人交流には攻撃的・競合的な性質が伴うものと見ていることを示す。Av.AG=0.11。

Fd (food 食物反応)

対人関係に影響するほどの依存的傾向の指標。青年や成人では、期待値は 0。Av.Fd=0.45。

PER (personal responses 個人的反応)

安心感の獲得や疑問をかわそうとする態度を示す。過度に用いる場合は弱みを見せない防衛の表れと解される。

Sum T

FT+TF+T 親密にしたい欲求や親密さを受け入れたい欲求と関係している。期待値は 1。T=0 は欲求の欠如ではなく、親密な繋がりに慎重であることを示す。

GHR:PHR (good human representation: poor human representation)

対人関係上の適応・不適応と関連している。健常者には PHR は少ない。

a:p (運動反応 (M, FM, m) の active: passive 動的運動と静的運動の比)

対人関係でより受動的な役割を取ろうとする傾向の有無を判断する。p の頻度が a よりもかなり高い場合は受動的対人関係スタイルを反映する。

Human Contents

H+(H)+Hd+(Hd) 人間反応の和 Hx は含まない

他者に関する関心の程度を評価する基礎的情報が得られる。成人の H の平均実数は 2.95, (H) のそれは 0.81, Hd は 1.25, (Hd) は 0.49 である。

Pure H

H のみ。人を含む社会環境に対する見方や態

度に関する情報が得られる。現実に基づいた他者認知の指標となる。

Isolation Index (孤立指標: 2Cl (雲)+2Na (自然)+Bt (植物)+Ge (地図)+Ls (風景)/R)
 いずれの Contents も出現頻度は低い。社会的孤立に関する数値で、不適応や社会的葛藤を示すものではない。人との交流を嫌うか関心がないことを示す。Av.孤立指標=0.15。

対人知覚に関する解釈の手順 ステップ表

1 : CDI (対処力不全指標 Coping Deficit Index)

対人知覚, 対人行動, 感情, 資質とコントロールに関連した 11 の変数で構成されている。社会的未熟さや不適切さに関連した情報が得られ, 他者との親密で成熟した関係の構築や継続の困難さを知ることができる。

2 : HVI (Hypervigilance Index 警戒心過剰指標)

予め予期し, 警戒を怠らない性格特徴を示し, 外界に対する否定・不信と関連している。問題の勃発を心配し, 即応態勢を維持するために絶えず身構えていることを示す。Av.HVI=13%, Av.Zf=13.64, Av.Zd=-2.27, Av.S=2.80, Av.人間反応=5.49, (H) (Hd) (A) (Ad) が高い, Av.Cg=1.63。

3 : a : p

運動反応 (M, FM, m) の active : passive
 Av.a=4.66, Av.p=3.95。

4 : Fd food 食物反応

5 : T =Sum T 材質反応

6 : Human Contents と Pure H の数

7 : GHR : PHR

8 : COP と AG

9 : PER

10 : 孤立指標

11 : ペアの M と FM の内容

自己知覚の吟味でも用いられるが, ここでは相互関係の内容に一貫性やパターンがあるかの確認と関係の特徴付けるような言語表現を検討する。

『これらの指標は, 他者の捉え方や関係性に焦点をあてている。この内容を検討するための情報は, 人間反応や人間運動反応, 対称の人間知覚とその情

緒的關係の内容, 愛情欲求や依存欲求の指標の有無, 受動性や防衛の特徴などから導き出される。片口法では, M の量と質から共感性を, 濃淡反応から不安準備性や感受性を, 人間反応の量と質から対人関係のあり方の情報を得ようとするが, Exner 法ほど体系的に焦点を当ててはいないように思われる。』

(え) 自己知覚に関するクラスター (Self-Perception)

3r+(2)/R

Egocentricity Index 自己中心性指標

鏡映 (ミラー) 反応 (r) × 3 + ペア反応の数 / 総反応数

自己への関与と自尊心の程度を示す。成人の平均域は 0.33 から 0.45

r 反応がないと positive な自尊心を示すとは云えない。ペア反応の平均は 6.03。

Fr+rF

形態鏡映+鏡映形態 (Exner 法では r のみはない)

自分のことにどれ位関心が集中し, 時間やエネルギーを費やすか自己中心性・自己過大・自己愛を示す。SumFr 即ち (Fr+rF) の平均は 0.21。鏡映反応ありは日本人健常者の 15%。

Sum V

FV+VF+V 展望反応の総和。濃淡から興行きが知覚されている。negative な感情を引き起こす類の自己検閲の傾向とそれらの特徴へのとらわれを示している。片口法の FK 立体反応の一つに当たる。

片口法では, 内的努力で不安を客観化し, 問題との間に距離をおき, 洞察しようとする試みを示すとされる。

FD

形態立体反応。

肯定的に解される内省や自己検閲の傾向があることを示している。SumFD の平均は, 0.64。

片口法では FK 立体反応の 1 つに当たる。

An+Xy

解剖とレントゲンの反応。

共に出現頻度は低い。多いと身体的自己への関心や捉われを示す。

MOR

morbid 損傷反応。1 を超えると損傷感を伴う自己知覚や自己に関する悲観的な思考と繋が

り易い。

H : (H) + Hd + (Hd)

自然で生き生きとした人間像とそれ以外の人間知覚の比。自己イメージ and/or 自己評価についての手掛かりが得られる。この比率は $H \geq 3$ で有効。適応上の問題を抱えている場合前者は後者より少。

自己知覚に関する解釈の手順 ステップ表

1 : OBS と HVI

OBS (Obsessive Style Index 強迫的スタイル) 完全主義への捉われを意味する。強迫的な人は、自分の能力に疑問を持ち、不全感を抱き易い。失敗した際の自己評価が下がり易い。HVI (Hypervigilance Index 警戒心過剰指標) 傷つき易さへの捉われを示す。傷つかないようにエネルギーを使うが、自分の行動の適切さや評価の確信が揺らぐと過剰な警戒心を強める。

2 : 鏡映反応 Fr + rF

3 : 自己中心性指標 $3r + (2)/R$

4 : FD と Sum V

5 : An と Xy

6 : MOR の数

7 : H : pure H 以外の人間反応

8 : - 反応・MOR・M と人間反応・FM と m 反応・その他の表現の内容を読む

これは投影された内容を吟味する作業である。- 反応は神経学的障害によるものでなければ、知覚が内的な心理的構えや働きに歪められているような精神活動を示唆する。また主観的な修飾や主題の繰り返しや特異な意味づけから自己表象を示すものがないか検討する。この吟味の際には、どのカードにどのような反応があったかを全体を通して詳細に見ることが必要である。

『個人が自分の特性に関して抱く印象である自己イメージと自分自身へ向ける関心の程度(自己への関与)を見ようとするものである。当然、人間反応の種類や人を見る際どのような修飾がされているか、人は対になって見られているか、人と人との関係はどうか等が吟味の内容となる。Exner 法では、これらの吟味に加えて、自己像に影響すると思われる OBS や HVI の検討も行われる。自己像の評価で人間知覚や特異な言語的表現等の検討は、基本的には

片口法に於いても同様であるが、片口法では、自己イメージカードの選択からも自己像の検討が行われる。』

以下の情報入力・媒介・思考の三つのクラスターは、blot を知覚し反応を形成するまでの認知活動に関する過程を吟味する作業である。認知活動に関するクラスター(情報処理、認知的媒介、思考)と一緒に検討する。

(お) 情報入力に関するクラスター (processing)

Zf Z スコアがついた反応の数

Z は部分を指摘し W に構成したもの、D と D を関係付けたもの、S を反応に含めたものに付与される。期待される平均的 Zf に達するのは難しくはない。単純な W より別々の概念を意味あるものに統合したり、S を取り入れる方が複雑な情報処理を必要とする。期待値より高ければ刺激野の処理に多くの努力を払っていることを示す。

W : D : Dd (Economy Index 節約指標)

情報処理努力のやり方とその経済性の指標。W に構成するのが難しいカードもある。全カードに W を出すのはかなりの努力がいるが効率が良いとは云えないし、良いやり方とは限らない。D は出し易く情報処理努力が経済的とも云える。Exner は、10 歳以上では W よりも D が多いと云うが、日本人の場合高い W% を示すことはまれではない。

日本人成人非患者データの W の平均実数は 11.04、D のそれは 9.38 である。

W : M (Aspirational Ratio 野心比)

情報入力の努力と実際の能力の比。達成要求の度合い(欲求水準)と課題達成に利用可能な資質に関する指標。

片口は 3 : 1 が平均 (p227) とするが、Exner は体験型によって異なるとする。成人の W の平均実数は 11.04、M のそれは 3.80。

Zd (Processing Efficiency)

情報処理の際のスキニングの効率。Zd = Zsum (Z 値の合計) - Zest (Zf から期待される Z の値)

Zd の平均は、-2.27。

Zsum > Zest 差が +3 以上 処理に多大な努力を払い過度に几帳面慎重。

Zsum < Zest 差が-3以上 刺激走査（スキヤニング）を急ぎ、場当たりので重大な部分や手掛かりを見逃し易い。

- PSV 固執反応
- ・同一図版内の固執 同じ一塊のスコアが2つ続く2つ目の反応からを固執とみなす。
 - ・内容の固執「さっきの○○」
 - ・機械的固執

PSV は認知的機能障害。情報処理の効率に問題があることが示唆される。著しい心理的とらわれ、視点の転換の失敗。認知的非柔軟さと堅さを表す。

DQ+ 発達の質の評定が+のもの。

成人の DQ+ の平均実数は 5.55。

DQv 発達の質の評定が vague のもの。

DQ は情報処理の質だけではなく、認知的媒介と概念化にも関係している。DQ+ は複数の形態確定的概念が統合されているもので、質の高い分割と統合の結果である。DQv は形態半確定と不確定概念で刺激野の分割はほとんどされておらず、統合は全くない。情報処理が散漫で不適切なことを示す。

情報入力に関する解釈の手順 ステップ表

L (F/R-F), EB (M:WsumC), OBS (強迫), HVI (警戒心) を前もって検討する。

L が高い回避型の対処スタイルは情報処理が控えめで、徹底しない。

EB の所見なくしては、W:M の正しい解釈はできない。W の数は内向・外拡でほぼ同数だが、M は内向の方が外拡よりも多い。

強迫的な人は、情報処理行動において非常に注意深い。警戒心過剰な人は、情報処理に過剰にエネルギーを費やすので、細部への関心が行き過ぎ、全体を処理できなくなることがある。

- 1 : Zf (Zスコアの数)
 2 : W : D : Dd (節約指数)
 3 : 領域の継起 summary of approach

どのカードに W が出ているかと継起が一貫しているかを検討する。継起のパターンが一定でないと、情報処理活動の質は低くなってしまふ。問題解決や意思決定の際の情報処理努力やそのやり方が不規則になっているからである。片口はこれを継起型 (succession) として僅かに扱っていて (p176), 4つの型に別けるが、極端な

厳格型と混乱型のみを問題にした方が無難だろうと述べている。

- 4 : W : M 野心比
 5 : Zd 情報入力効率
 6 : PSV 固執反応
 7 : DQ 発達の質
 どのカードで DQ+ や DQv が出たかも検討する。
 8 : DQ の継起

情報処理努力の質を理解するのに役立つ。blot が分かれているほど DQ+ は生じ易い。カード内の DQ+ や DQv の継列を見るのも重要。DQ+ が初発か後発かで情報処理の質の良さや慣れ、組織化まで作業を続ける辛抱強さ等を検討できる。

『この項は、blot をどのように捉え処理しているかを見ようとしている。情報処理の努力や動機づけと情報処理の質や効率を吟味するのである。片口法では、把握型とその継起や概念の形態確実度そして形態水準で blot の処理の仕方の評定を行う。そういう点では片口法と Exner 法とでは大きな差は見られないが、上記の変数を認知の三側面の一つ、知覚-認知過程の最初の段階として取上げ、後に続く情報の翻訳と概念形成と別けて細かく検討している点では、Exner 法の方が知覚-認知の分析では、より系統的であり詳細である。』

(か) 認知的媒介に関するクラスター (Mediation)

XA% FQ が+とoとuが総反応数に占める割合。ほぼ R+%に相当。0.8でOK。

WDA%

W と D の+とoとuが W と D で占める割合。片口法では、W と D の+%にほぼ相当。XA%と WDA%は、認知的媒介活動から生じた反応がどの程度状況 (blot) に合致しているかを扱っている。両者の値はある程度高く近似していることが期待されるが、普通は WDA%の方が高いことが多い。

X-% FQ-/R×100

X-%の平均は10%。

S- 領域がSでFQが-の反応の数

X-%とS-は、不適切な反応に焦点を当てて検討する。-は情報処理段階に原因がある場合もあるが、感情要因や思考の構えや捉われで

blot の特徴を誤って同定することの方が多い。なんらかの原因のために、blot は無視され内面世界が投影される。多くの-は著しい認知機能の低下を示している。X-%は 15%未満が期待値。-反応の数は 1~3 以内。

P 平凡反応。実数を記入。

その場で期待される行動や受け入れられる規範が判っている場面で、慣習的で常識的な行動をするかどうかを知る指標。6~8 個が平均的。P 反応の平均は 5.61。

X+% FQ+と o が総反応数に占める割合

o 反応の占める割合だが、+も含まれる。+は o に行き届いた明細化が施されたものである。o 反応は最も頻繁に出現する反応であり、認知的媒介の決定は一般的で慣習的な傾向を示している。X+%の平均は 73%。

Xu% FQu が総反応数に占める割合

u は blot の特性に一致した反応だが、出現頻度の少ない反応である。片口法での独創反応 (O) もこの中に含まれる。慣習的ではなく独創的で創造的な反応である。25%を超えるならば、個性的傾向が強すぎ、慣習的で社会的に期待される行動がとれないことも検討する必要がある。Xu%の平均は 18%。

認知的媒介に関する解釈の手順 ステップ表

最初に、R (総反応数)、OBS (強迫的スタイル指標)、L (F/R-F) を見る。

認知的媒介を検討する時は比率を見ることが多いので、R を念頭におくことが重要となる。OBS 陽性の人は、blot の翻訳に際し、非常に慎重で用心深く精密であることが多い。L は、-反応の同質性を検討する時のガイドラインとなる。

1 : XA%と WDA%

総反応と W+D で FQ の +, o, u の占める割合。

2 : 無形態反応 (片口の形態不確定反応に相当)

頻度は 0 か 1。多いと、媒介過程の最中に内的刺激に妨害されて認知的媒介活動の効果が損なわれたことを示す。多くは C, C', T, V を伴い、強い感情が背景にあること、Mnone は統制されていない思考活動に影響された結果である。

3 : X-%, FQ-の頻度, S-の頻度

-反応は、思考の構え、捉われ、感情的要素な

どで起こるので、機能低下に関する共通の要素 (同質性の問題) を探求する。-反応が、課題の理解不足や受検不安、動機付けの不足などの状況への反応ならば機能低下は一過性のもと考えられる。

また、-反応の歪曲レベルは異なっていて、類推できるもの (soft minus) から全く了解不能のもの (hard minus) までである。歪曲の程度がひどいと、不適切な行動をとる可能性を示唆する。

4 : P 反応

5 : FQ+の頻度

かなり知的に優れている人の場合、1~3 の FQ+が見られることが多い。知的に高いのに FQ+が無いのは、意欲の無さや防衛的構えなどが疑われるし、多すぎる場合は詳細で正確であろうとする顕著な傾向を示している。

6 : X+%と Xu%

『この項は、処理された刺激野と記憶痕跡とがどのように結びついて行くか、即ち blot の特徴と表象の特徴とが結び付けられ、翻訳されていく過程を検討する作業である。Inkblot は完全に曖昧なものではない。何かを同定する重要な最小情報がある。この重要な最小情報は、同定する反応の範囲を限定するだけでなく、blot や特定の blot の領域に特有の種類の反応を引き出す働きをする。片口も (p 157)、ある程度の曖昧さを備えながら、同時にある一定の形に見られ易い形態的特性をも有していると述べている。Exner 法では、この件は FQ の分類で扱われている。』

片口法と Exner 法の形態水準評定の大きな違いは、前者が概念の持つ形態と blot の形態のマッチ度を問題にするのに対し、後者では沢山のデータを基にある領域にある反応がどの程度の頻度で見られているかを問題にしている点である。FQ+や o, u は形態のマッチ度、色彩、濃淡、運動といった複数の要素が同定の媒介情報となっていることに間違いなく、それ故、質疑段階での明細化から得られる情報は重要となる。』

(き) 思考に関するクラスター (Ideation)

a : p M, FM, m における active と passive movement の総比。

(a+p) が 4 以上の時に解釈上の意味がある。

両辺の差が多ければ、態度や価値観の柔軟性の乏しいことを示し、それが概念化の範囲に影響していて、比較的狭い、凝り固まった概念の枠組みの中でしか考えられない。思考は柔軟性を欠いている。

Ma : Mp Mactive と Mpassive の比

M > 2 で仮説が有効となる。

Mp > Ma だと、ストレス下では防衛的に空想を用いる傾向を示す。成人の平均実数は Ma が 1.90, Mp が 1.91 である。

2AB+ (Art+ Ay) (知性化指標 Intellectualization Index)

AB (アブストラクト 抽象的内容。Hx がコードされた場合と明確に象徴的表象を述べている場合。特定の防衛機制に関するもの。) Art (芸術) Ay (人類学)。

概念的思考が防衛として使われるのが知性化である。知性化が過剰だと思考は論理性を欠き、誤った解釈に基づく概念形成の要因となる。

MOR Morbid 損傷反応

3 以上だと、概念思考は悲観的構えが目立ち、4 以上では悲観的構えが思考の質を大きく低下させる。

Sum 6 Raw Sum 6 = DV, INC, DR, FAB, ALOG, CON の数

Lvl-2 レベル 2 の重要特殊スコア (DV, DR, INC, FAB, CON)

Wgtd Sum 6 Raw Sum 6 に加重 (weight) をしたものの総和

M- M 反応で FQ が - のものの数

Mnone 形態のない概念で M が用いられた反応の数

(* 上記 Sum6 から Mnone までは思考障害に関する指標)

思考に関する解釈の手順 ステップ表

1 : EB と L (M : WsumC と F/R-F%)

体験型と回避的対処スタイルの程度から、意思決定の際の思考活動と感情との関係を見ることができる。

2 : EBPer (EBPervasive 体験型の浸透度)

EB の大きい方の値を小さい方で割った値。体験型の柔軟性を示す。固定していると意思決定や対処行動に柔軟性がない可能性がある。

3 : a : p

4 : HVI, OBS, MOR

これらの変数は、概念を形成したり使ったりする仕方に影響を与える構えや態度と関係している。OBS 陽性は正確さを期する概念形成が複雑となる。必要以上に思考の努力や活動をしようとする。HVI 陽性は、概念的思考が明確ではなく、柔軟性にも乏しい。論理的でない思考パターンに陥る。

5 : eb の左辺 基礎体験 左辺は FM+m

注意や思考を困難にする欲求体験や周囲からの要請 (辺縁思考) のレベルの指標。平均の範囲は 3~6。片口法では、FM は直接的な満足を得ようとする衝動を感じることで、m は内的緊張と関係しているという。

6 : Ma : Mp

7 : 知性化指標 2AB+ Art+ Ay

8 : Sum 6 と WSum 6

思考が明確か特異かを検討する指標である。それぞれが認知的誤りや思考のずれがあることを示している。DV1, INC1, DR1 は思考に明確さが欠けていることを示す。概念や思考の問題を端的に示すのは、認知の中程度の機能低下を示す DV2, FAB1, INC2, ALOG や重度の機能低下を示す DR2, FAB2, CONTAM の存在である。成人の Sum 6 の平均は 0.69, Wsum6 は 2.04。

9 : 6 つの特殊スコアの質

不適切な言語表現がその文化や教育水準によるものなら思考のずれとは言い難い場合もある。

10 : M の形態水準

M の形態水準からは思考の明確さが評価できる。M は +, o, u であることが求められる。M- は期待よりも鈍い思考、混乱した思考を示している。

11 : M の質

M は思考の質と明確さを評価する、優れた資料である。M は一般に blot との形態にも合致し、説明は的を射ているので明確な思考を反映している。

『ここで云う思考は、情報の入力、情報の翻訳に続く概念化活動のことである。思考 (概念化) 活動とは、反応の中心的な形態的特性以外に、見たものに付随している運動・感情・人と人との関係・その他さまざまな修飾を明細化することを云う。概念化

された内容 (明細化) からは使われる素材の豊富さが判るが、それよりも概念化の質が重要である。それ故、動きの激しさやその知覚の整合性、特異な言語表現の評価を通して質の検討を行うのである。現実吟味を十分に効かした豊かな反応の裏には、的確な思考活動がある。』

クラスター検索の順序

検討するクラスターの順番は、表 2 に示す 12 の鍵変数の最初から順にチェックして行き、最初にヒットした変数が示すクラスター検索順路に従う。これらの鍵変数は、重要な順番になっており、最初に該当した鍵変数の解釈手順に従うと、クラスターのどの組合せがその人の心理学的特徴の情報を最もよくもたらすかを予測してくれるようになっている。

鍵変数の内最初の半分 (PTI>3……AdjD<0) はパーソナリティの構造だけではなく、同時に精神病理の存在や人格の崩壊の可能性に焦点を当てている。後半の 6 変数は、より基本的なパーソナリティ・スタイルに関連していて、心理的機能とその働きについての基礎的情報を提供している。この検索順路には、認知活動に関する情報処理・媒介過程・思考は一緒に、また自己知覚と対人知覚も一緒に解釈するというルールがある。

しかし、鍵変数が見つからない場合もあって、そういう時は第三の変数に基づいた検索戦略を用いることとなる。(Exner 2000 p35 参照)

その他の Index

構造一覧表の最下部には幾つかの特殊指標が並んでいる。その一部は前述のクラスターに含まれていた。既述した S-CON 以外のこれらの特殊指標の内容を概観してみたい。

(1) SCZI (Schizophrenia Index) 統合失調症指標 (1989)

1. $X+ \% < 61$ かつ $S- \% < 41$, あるいは $X+ \% < 50$ のいずれか
 2. $X- \% > 29$
 3. $SumFQ- \geq SumFQu$, あるいは $SumFQ- > Sum(Fqo+FQ+)$ のいずれか
 4. $Sum Level 2$ 特殊スコア > 1 , かつ $FAB2 > 0$
 5. $Raw Sum 6$ 特殊スコア > 6 , あるいは $Wgd Sum 6 > 17$ のいずれか
 6. $M- > 1$, あるいは $X- \% > 40$ のいずれか
- SCZI の臨界値は 4。

思考の歪み、不正確な知覚、対人関係の貧弱さ、コントロールのまずさを評価している。SCZI 値 6 だと、反する証拠がなければ診断として確定の可能性が大となる。幾つかの統合失調症の特徴の中から、思考障害と不正確な知覚の二つの特徴がロ・テストで統合失調症の徴候を見ようとする研究の中心となった。

不正確な知覚: P, X+%, F+%, X-% の 4 変数は他者と共通した知覚や知

表 2 鍵変数による解釈手順の戦略

鍵変数	クラスター検索順路
PTI>3	情報処理過程→媒介過程→思考→統制→感情→自己知覚→対人知覚
DEPI>5 かつ CDI>3	対人知覚→自己知覚→統制→感情→情報処理過程→媒介過程→思考
DEPI>5	感情→統制→自己知覚→対人知覚→情報処理過程→媒介過程→思考
D<Adj D	統制→状況ストレス (以下の順路は次に該当する鍵変数による)
CDI>3	統制→対人知覚→自己知覚→感情→情報処理過程→媒介過程→思考
Adj D<0	統制 (以下の順路は次に該当する鍵変数による)
L>0.99	情報処理過程→媒介過程→思考→統制→感情→自己知覚→対人知覚
鏡映反応あり	自己知覚→対人知覚→統制 (以下の順路は次に該当する鍵変数による)
体験型内向型	思考→情報処理過程→媒介過程→統制→感情→自己知覚→対人知覚
体験型外拡型	感情→自己知覚→対人知覚→統制→情報処理過程→媒介過程→思考
p > a+1	思考→情報処理過程→媒介過程→統制→自己知覚→対人知覚→感情
HVI	思考→情報処理過程→媒介過程→統制→自己知覚→対人知覚→感情

覚の正確さを評価できる。特に X+% (プロトコル中の o 反応の割合) は認知的媒介の決定が一般的で慣習的であることを示す。X-% は現実を無視したり、歪曲した反応の割合を示す。統合失調症者の 94% 強が、X+% < 70, X-% > 20 を示す (Exner, 1986 p502)。

思考障害: M-, Mnone, 6つの重要な特殊スコアで、思考の流れの乱れ、因果関係の不合理な結合、不可解な抽象的捉われ、特異な象徴化、著しい一般化などを検討する。M- や Mnone が存在するだけで、奇妙な思考あるいは思考障害の存在が示唆される。特殊スコアが 4 を超え、Wsum 6 > 11 の時は、かなりの認知的欠陥が存在する可能性が高い。

(2) PTI (Perceptual-Thinking Index) SCZI を修正したもの。

知覚と思考に障害はないか見ようとする指標で、以下の 5 つの指標の内、PTI > 3 は障害の可能性を示唆する。

1. XA% < 70 かつ WDA% < 75 片口では、R+%, W+%, D+% に近い概念
XA% = FQ+, o, u/R (全反応中、FQ- 以外の反応が占める割合)
WDA% = W と D で FQ+, o, u/W と D の反応総数 (W と D の内 FQ- 以外の反応の占める割合)
形態水準 + と o と u が全体の 70% 以下で、かつ W と D のそれも 75% を切っている。
2. X-% > 29 X-% = FQ-/R (全反応中、FQ- の反応が占める割合)
全反応中、FQ- の反応が占める割合が 30% 以上である
3. Special Scores Level 2 > 2 かつ FAB2 > 0
特殊スコアの内、DV, DR, INC, FAB, CON のレベル 2 が 2 個以上あり、その中に FAB のレベル 2 が含まれている。FAB の平均は 0.35。
4. R < 17 かつ Wsum 6 > 12, または R > 16 かつ Wsum 6 > 17
反応数が少なく、Special Scores (DV, INC,

DR, FAB, ALOG, CON の 6 種) の加重得点総和が 12 を超えるか、又は反応数は 16 を超えているが、Wsum 6 が 17 点以上の何れかに該当する。

5. M- > 1, または X-% > 40

人間運動反応 FQ- があるか、FQ-% が 40% を超えるかの何れかに該当する。成人における M- の平均は 0.15。

SCZI の臨界値 4 では他の精神病様状態や爆発的行動をとる若年者の判別が困難であったこと、また統合失調症のスペクトラム概念の導入にあわせて認知の媒介や思考障害を持つ人の識別の妥当性研究の結果として、PTI が作成された。知覚と認知の媒介の問題を識別する XA% と WDA% の 2 変数が加えられた。

(3) DEPI (Depression Index うつ指標)

1. (FV+VF+V) > 0, または FD > 2
2. Col-Shd Blends > 0, または S > 2
3. $3r+(2)/R > 0.44$ かつ $Fr+rF=0$, または $3r+(2)/R < 0.33$
4. Afr < 0.46, または Blends < 4
5. Sum Shading > FM+m, または Sum C' > 2
6. MOR > 2, または $(2 \times AB + Art + Ay) > 3$
7. COP < 2, または $(Bt + 2 \times Cl + Ge + Ls + \times Na)/R > 0.24$

臨界値は 5 で、6, 7 でもっと確定的となる。

14 の変数から成る。感情・認知・対人関係・心理的複雑さの情報が得られる。

MOR, 自己中心性指標, FD, 知性化指標は認知活動を, Col-Shd Blends, C', Afr は感情と関係している。心理的苦痛や抑うつの訴えの程度を示す。

(4) CDI (Coping Deficit Index 対処力不全指標)

DEPI では、抑うつ感情障害のうち「無力な人 helpless」と分類される一群の鑑別が困難であった。そこで、10 変数による 5 つの基準が作成された。基準を 4 以上満たす時適用される。

1. EA < 6, または AdjD < 0
2. COP < 2, かつ AG < 2
3. WSumC < 2.5, または Afr < 0.46
4. Passive > Active + 1, または PureH < 2
5. SumT > 1, または孤立指標 > 0.24, または Food > 0

CDI の変数は、多くが社会的活動、対人関係に関係している。CDI > 4 の人は、報われない乏しい

社会関係しか持ちえていない。

継列分析と言語表現 (内容) の分析

Exner は、上記した構造的変数こそが核心的データで、多くの特徴を捉える信頼でき、有効な指標であると言う。しかし、構造的変数だけでは十分ではなく、全体像を肉付けするには、継列分析と言語表現の分析とを統合する必要があるとしている (Exner 1986 p514)。但し、継列分析と言語表現から得られる仮説は、主観的色彩の濃いものになるので、構造的資料から得られた結果と結び付くものだけを取上げる慎重さが求められる。

継列分析では、以下の7つのポイントを検討する。
①アプローチ (継起) のパターン。領域選択の一貫性について。②ーや u, または blend の出現の様相。続いて見られるか、どこで見られるか。③反応質が低下した後、その低下は持続するか、または回復するか。④平凡反応はどこに出現しているか。また、運動・色彩・濃淡への言及はあるか。⑤組織化活動 (構成度・結合性) は全般に亘っているか。⑥S 反応は初めに偏ってはいないか。通してみられるか。⑦特殊スコアはどの特徴を持つカードにみられるか。

Exner は、言語表現 (反応内容の分析) は、これまでの研究からは、特定のカテゴリーを定式化する、即ち特定の反応内容に特定の象徴的意味を付することには問題が多いので、何故これらの特異な反応があったのかとか、この反応には象徴的意味があるのではと考えない方がよいと言う (p518)。Exner は、父親カード (IV)、母親カード (VII)、Sex カード (VI)、対人関係に関連するカード (III) など特定のカードが特定の事柄を表すという仮説には否定的である。けれども、反応には、有効な情報を収集できる運動や修飾のある豊かな反応と分析しても何も得ることのない類型 (classification) 反応とがあり、運動や修飾のある反応には、明細化の中には欲求やある種の態度や葛藤がくどい言い回しで投影されることがあるので、欲求や捉われを示すような内容と誰もが見做せる場合は、そこから得られる仮説は有効なものとしている (p518)。また、内容ばかりでなく被検者の言葉から不安や自信欠如といった情報を得ることもできると言う。

片口は、投映法としてのロ・テストが単なる客観的追求に終わるべきではないとして、各カードの特性を考慮しつつ力動的解釈を試みる方法としての継

列分析の重要性を強調している。そして、自身でまとめた分類表を作成した (片口 1987 p234-235)。そこには、各カードの反応数・時間・領域・決定因・内容・好嫌選択・SD 法による印象評定などの特徴が記載されている。Exner 法における形態水準表の情報に重なる内容も含まれている。片口は、特殊な内容分析法と題して、Lindner の内容分析、Schafer の主題分析、DeVos の感情カテゴリー (affective symbolism) を紹介しているが (p206)、固有の意味合いを追求しすぎること懸念を表明し、内容分析には批判的あるいは諸家とは異なった見解を持っていると述べている。また、Exner 同様、言語的反応のみを記録するのではなく、特徴的なあるいは目に付く行動をも記録することが大切としている。

おわりに

以上、Exner 法の構造一覧表に沿って、解釈の準備・仮説の抽出過程についてまとめ、片口法との可能な対応を示してみた。「統制」を初めとするクラスターや問題に焦点化した指標を用いた評価、即ち7つの心理的特性と5つの特殊指標は、片口法で用いられる Piotrowski の Organic Signs や片口の同性愛指標 (RHI) と同様のサインアプローチを機能や問題・障害別に関係する変数で体系化したものと理解できる。片口法の形式分析も個々の変数から読み取れる特徴を仮説として抽出し、知的側面・情緒的側面・対人関係・内向外拡などに焦点を当て解釈をするが、Exner 法ほどチェック項目のマニュアル化はされていない。別の表現をすれば、片口法では、解釈仮説の集約の根拠となる変数の取上げ方は検査者の判断によって若干異なる可能性があると言える。誰もが同じ手順を踏むことで、ほんの僅かな差異もなくすことを Exner 法は狙っていると言える。片口も「投映法における最も重要な点は、被験者から得られた主観的な反応を、客観化することにある。」「こうした理解を、独断に陥ることなく、より科学的、より客観的におこなうことの意義を痛感する (片口 1987 p iii)」として、経験的・主観的要素の排除を狙う形式分析の重要性を述べている。しかし、同時にサイコメトリー化しない妙味 (p17) も、「リベラルな精神の土壌の上のみ実る (p ii)」のがこのテストの本来の意義として、継列分析の重要性を強調している。Exner は解釈に至るこれだ

けの体系的ステップを提唱しつつも、最終的な解釈 (Exner 1986 p514~520) の項で、継列分析と言語表現の分析を併せて要約をするように求めている。

確かに、構造的変数を第一義とする Exner 法の方が、システム構築の経緯からも、また扱う変数の量からも、更にはマニュアル化されたステップ表の使用からもシステムティックと評価できる。片口法は Klopfer 法をよりスリムにして構築されてきた。それ故、我々は Exner 法は evident based で nomothetic であり、片口法は narrative で idiographic な印象を持ち、そう評価しがちであるが、データを処理し解釈仮説を抽出してくる経過を見れば、両法共に解釈に当たって、特定の理論を背景にせず過去の量的研究から得られた解釈仮説に則っている点や各種の変数や継列そして言語的表現を重要視している基本姿勢は何ら変わることはない。

次の報告では、3-2として片口法の整理・集計・解釈準備段階について述べ、最後に4として事例を取り上げ、この二つのシステムでデータを処理し、解釈を試みることで両法の特徴を示す試みをした。

引用文献

- Exner, J. E. Jr. 1986 The Rorschach: A Comprehensive System Vol.1: Basic Foundation 現代ロールシャッハ・テスト体系 (上・下) 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 金剛出版 1991
- Exner, J. E. Jr. 2000 A Primer For Rorschach Interpretation ロールシャッハの解釈 中村紀子・野田昌道監訳 金剛出版 2002
- 藤岡淳子 2004 包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房
- 片口安史 1987 改訂 新・心理診断法 金子書房
- 荻和忠史・空井健三 1993 エクスナー法「特殊スコア」に関する一考察 中京大学文学部紀要 28 (1) p22~36
- 中村紀子 1995 現代のロールシャッハ・テスト-包括システム (エクスナー法)-精神医学レビュー NO.17 p21 ライフ・サイエンス社
- 名古屋ロールシャッハ研究会 1999 ロールシャッハ法解説一名古屋大学式技法一 p34-43
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較(1) 施行法と反応領域・発達水準などの記号化について 中京大学心理学研究科・心理学部紀要第4巻第1号 p27-34
- 八尋華那雄・明翫光宜 2004 ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較(2) 反応領域・形態水準評定・反応内容・平凡反応について 中京大学心理学研究科・心理学部紀要第4巻第1号 p35-44